

粕屋町文化財調査報告書第 53 集

内橋登り上り遺跡第 5 地点

2020

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、粕屋町大字内橋字登り上りに所在する内橋登り上り遺跡第5地点について、平成30年度に粕屋町教育委員会が実施した民間開発に伴う発掘調査と、並行して行った国庫補助金及び県費補助金を活用して実施した町内遺跡確認調査の成果を記録したものです。

内橋登り上り遺跡第5地点周辺は、内橋鏡遺跡に甕棺墓群が所在し、前期前方後円墳である内橋カラヤ古墳、夷守駅の可能性が高い内橋坪見遺跡が位置しています。今回の調査で古墳時代中期の円筒埴輪が出土し、町内における古墳時代の歴史解明に寄与するものだと考えられます。

本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるときにも、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に御協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様から謝意を表します。

令和2年3月31日
粕屋町教育委員会
教育長 西村 久朝

01 1. 経過・位置と環境

02 調査に至る経過

02 調査体制

03 地理的環境

03 歴史的環境

08 溝状遺構

18 カマド状遺構

18 井戸

21 土坑

24 拡張トレンチ

26 おわりに

07 2. 調査成果

08 遺跡の概要

08 掘立柱建物

27 3. 図版

発行	粕屋町教育委員会
調査起因	共同住宅建築工事
現地調査	平成30年9月6日～平成30年12月14日
整理調査	令和元年12月1日～令和2年3月31日
使用方位	座標北(国土地院第2系「世界測地系」)。真北に対して0°17'西偏。
遺物実測・製図・遺構写真・遺物写真・執筆・編集	高橋幸作
遺構実測	高橋幸作・福島日出海・朝原泰介・常盤拓生
資料整理	上田津由美・常盤拓生・松永メイ子・水上良行・毛利須寿代・山下真美

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収録・管理し、公開する予定である。

1. 経過・位置と環境

同時代の周辺の調査遺跡

内橋カラヤ遺跡・内橋鏡遺跡

- 『内橋鏡遺跡』柏屋町教育委員会 2015
- 『内橋鏡遺跡 2次調査・内橋カラヤ遺跡』柏屋町教育委員会 2017
- 『内橋カラヤ遺跡第2地点・第3地点、内橋鏡遺跡3次調査』柏屋町教育委員会 2020

内橋坪見遺跡

- 『内橋坪見遺跡概要報告書』柏屋町教育委員会 2013
- 『内橋坪見遺跡3次』柏屋町教育委員会 2015
- 『内橋坪見遺跡1次・2次』柏屋町教育委員会 2019

内橋牛切遺跡

- 『内橋牛切遺跡』柏屋町教育委員会 2013

内橋登り上り遺跡

- 『内橋登り上り遺跡』柏屋町教育委員会 1994
- 『内橋登り上り遺跡第2地点』柏屋町教育委員会 1997
- 『内橋登り上り遺跡第3地点』柏屋町教育委員会 1997
- 『内橋登り上り遺跡第4地点』柏屋町教育委員会 2001
- 本報告『内橋登り上り遺跡第5地点』柏屋町教育委員会 2020

阿志官衙遺跡(国指定)

- 『阿志遺跡』柏屋町教育委員会 2018

古代官道

- 『阿志茶屋遺跡』柏屋町教育委員会 2020

阿志原口遺跡

- 『阿志原口遺跡』柏屋町教育委員会 2004
- 『阿志原口遺跡第2地点』柏屋町教育委員会 2010

阿志古屋敷遺跡

- 『阿志古屋敷遺跡』柏屋町教育委員会 1995
- 『阿志古屋敷遺跡第2地点』柏屋町教育委員会 近年刊行予定

阿志天神森遺跡

- 『阿志天神森遺跡』柏屋町教育委員会 1996
- 『阿志天神森遺跡第2地点』柏屋町教育委員会 2016

江辻遺跡

- 『江辻遺跡第6地点』柏屋町教育委員会 2002

戸原御堂の原遺跡

- 『戸原御堂の原遺跡』柏屋町教育委員会 2000

戸原寺田遺跡

- 『戸原寺田遺跡』柏屋町教育委員会 2017

戸原堀ノ内遺跡

- 『戸原堀ノ内遺跡』福岡県教育委員会 1993
- 『戸原堀ノ内遺跡第2地点』柏屋町教育委員会 2007
- 『戸原堀ノ内遺跡第3地点』柏屋町教育委員会 2019

戸原伊賀遺跡

- 『戸原伊賀遺跡第1地点』柏屋町教育委員会 2019
- 『戸原伊賀遺跡第2地点』柏屋町教育委員会 2019

原町平原遺跡

- 『原町平原遺跡』柏屋町教育委員会 2019

経過・位置と環境

調査地周辺は弥生時代から古代にかけて連続と歴史を追うことができる地域である。古代の駅である夷守駅の可能性が高い内橋見遺跡が存在するなど、要衝であった地域と想定される。

調査に至る経過

内橋登り上り遺跡第5地点の発掘調査は、福岡県糟屋郡粕屋町大字内橋字登り上り284-1において、共同住宅の建築が計画されたことに起因する。

平成30年6月1日に、藤治三郎氏より粕屋町教育委員会へ、埋蔵文化財事前審査願書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財蔵地である内橋登り上り遺跡に含まれている旨を回答し、平成30年6月18日に確認調査を実施したところ、包含層と思われる遺構とともに古代の遺物を検出した。この結果をもとに協議を重ねたが、建築工法計画の変更は難しく、建築工事によって遺跡の破壊が免れないため、記録保存の発掘調査を実施した後、建築工事に着手することとなった。

平成30年7月25日に、緊急発掘調査に関する委託契約を藤治三郎氏と締結し、発掘調査を実施した。

調査期間は、平成30年9月6日から平成30年11月9日までとしていたが、調査の進捗とともに、包含層と想定していた遺構が溝状遺構であったこと、他にも数多くの遺構が発見されたこと、ま

た雨天時に調査範囲全体が水没し、その後も湧水が続くなどして調査作業が捗らず、契約期間内に調査が終わらない見通しとなった。そのため、平成30年11月5日に調査期間延長の変更契約を締結し、現地調査を平成30年12月14日まで行うこととなった。

調査途中、確認調査で包含層と想定していた溝状遺構から完形に近い円筒埴輪1個体が一括して出土し、掘削している遺構が古墳の周溝となるか確認する目的で、国庫補助金を活用して、建築範囲外の確認調査を行った。確認調査は発掘調査と並行して行った。

発掘調査報告書作成に係る出土遺物整理作業は、令和元年12月1日から令和2年3月31日の期間で行った。

出土遺物および図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

同課文化財係主幹 西垣彰博

同課同係主事

高橋 幸作(調査担当)

同課同係嘱託職員 福島 日出海

朝原 泰介

毛利 須寿代

同係臨時職員 上田 津由美

常盤 拓生

松永 メイ子

山下 真美

令和元年度

調査主体 粕屋町教育委員会

教育長 西村 久朝

社会教育課長 新宅 信久

同課文化財係主幹 西垣彰博

同課同係主任主事

高橋 幸作(報告書担当)

同課同係嘱託職員 福島 日出海

朝原 泰介

同係臨時職員 上田 津由美

常盤 拓生

松永 メイ子

水上 良行

毛利 須寿代

山下 真美

調査体制

平成30年度

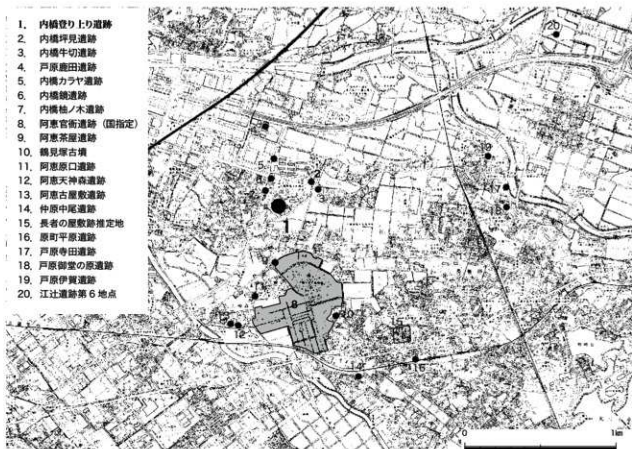
調査主体 粕屋町教育委員会

教育長 西村久朝

社会教育課長 新宅 信久

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に



第1図 内橋登り上り遺跡第5地点周辺の遺跡分布図(1/25,000)

位置している。町域は14.13km²と狭く、大半が平坦な地形である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は四王寺丘陵部によって福岡平野と区別される。東側の三郡山地を源とする3本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵部があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。平野内は東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く伸びているため、平坦な地勢の割に沖積地は河川流域に限られている。

内橋登り上り遺跡は、福岡市との町境に近い多々良川下流域の舌状低丘陵上に立地している。古代の周辺環境は、多々良川・須恵川・宇美川の合流する河口付近が、入江状の内海を形成していたと想定されている。遺跡はこの内海に

近く、博多湾と3本の河川を利用した海上・河川交通の集中する場所にあたる。また、博多湾に面する平野部の北端でもあり、これより北方は立花山丘陵部が平野を遮っている。

歴史的環境

粕屋町周辺は、博多湾東岸に位置するという立地環境もあり、早くから大陸・朝鮮半島との交流が認められる地域である。多々良川流域には、松菊里型住居で構成された渡来系稲作集落である江辻遺跡が弥生時代早期に登場する。

弥生時代中期には青銅器生産が知られる地域でもあり、多々良川対岸の上井遺跡群(福岡市)、多々良大牟田遺跡群(福岡市)では青

銅器鋳型が出土している。粕屋町域でも、内橋坪見遺跡と内橋登り上り遺跡で青銅製鋳先が、戸原鹿田遺跡で銅鏝、内橋カラヤ遺跡で青銅製の筒状遺物が出土しており、青銅器生産を基盤とした集落展開の様相が明らかになりつつある。また、弥生時代中期の喪棺墓群が内橋鏡遺跡や新大間池遺跡、戸原福ノ内遺跡、辻畑遺跡などで発見されている。その後、弥生時代後期の石蓋土坑墓、木棺墓などが内橋登り上り遺跡で、弥生時代終末期の方形周溝墓が内橋カラヤ遺跡で発見される。

このような地域的まとまりを背景に、古墳時代になると多々良川流域に前期前方後円墳である戸原王塚古墳、内橋カラヤ古墳、名島古墳(福岡市)が築造される。その後、中期には首長系譜が途切れるが、本遺跡では古墳時代中期



第2図 内橋登りより遺跡周辺図(1947年米軍撮影の航空写真)

と想定される円筒埴輪が出土した。共存遺物が6世紀後半の遺物であり、後世になっての搬入品と考えられるが、注目される。後期になると推定全長75mほどの前方後円墳である鶴見塚古墳が須恵川流域に築造される。現況は宅地化が進んで半壊状態であるものの、近世地誌『筑前国続風土記拾遺』に江戸時代当時の鶴見塚古墳の状況が詳細な計測値とともに記されており、周溝を含めた全長約86m、後円部南側に横穴式石室が開口して内部に石屋形が安置されていることをはじめ、墳丘形態・石室規模なども克明に読み取れる。これは那津官家の管掌者の墓といわれる東光寺剱塚古墳(福岡市)と同規模・同主体部であり、『日本書紀』継体22年の糟屋屯倉との関連が示唆される。

本遺跡の東1.3kmに位置する戸

原寺田遺跡では、6世紀後半から7世紀前半の遺物が出土する幅7.7mの断面台形の溝があり、紡いだ糸を巻き取る棒の腕木が出土している。その他にも、手工業に関わる鍛冶関連遺構、祭祀遺構を検出している。さらに、隣接する戸原御堂の原遺跡では同時期の倉庫群も確認していることから、大規模な区画溝を有し、周囲に倉をもった手工業工人を抱えた居宅と考えられる。また、遺跡名の「寺田」にも関わる東円寺(現伊賀業師堂)が隣接し、瓦散布は確認されていないものの、古い寺院が存在した可能性も考えられる。このような居宅関連遺構は、官衛成立以前における豪族支配体制の一端を示すものとして注目される。

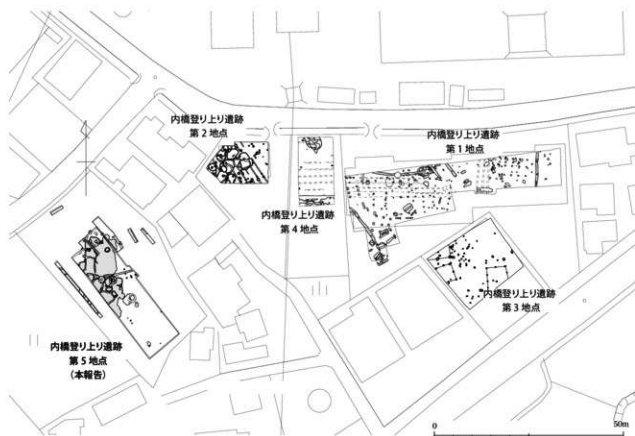
粕屋町は、古代において筑前国糟屋郡に属し、本遺跡の南1kmに位置する阿恵官衛遺跡で糟屋郡衛

が発見されている。

阿恵官衛遺跡は、7世紀後半から8世紀後半にかけて、政庁と正倉という地方官衛の主要施設の全体像を捉えながら、評衛の出現から郡衛の最盛期に至るまで地方官衛の変遷を追うことができる国内でも稀な遺跡である。さらに、698年の京都妙心寺梵鐘銘「糟屋評造春米連廣國」により糟屋評の長官の人物名が判明している。まさに阿恵官衛遺跡の政庁において「春米連廣國」という人物が評造として政務をおこなっていたことが特定された。文字資料により評の長官名が判明して、なおかつ発掘調査によって評衛の場所が明らかにされたのは、我が国で阿恵官衛遺跡が唯一であり、その歴史的価値は極めて重要である。

8世紀前半に阿恵官衛遺跡の政庁が移転した後(正倉は8世紀後半まで残る)、郡衛の移転先はいくつか候補地がある。谷を隔てた北側の微高地上にある阿恵原口遺跡は、阿恵官衛遺跡の政庁と同じ方位の官衛建物が直交に配置されている。周辺にも官衛建物が展開している可能性がある。また、阿恵官衛遺跡の東方約0.9kmの地点に1町四方の区画があり、『筑前国続風土記拾遺』では「長者の屋敷跡」と記されている。遺構は確認できていないが、区画の方位が阿恵官衛遺跡の政庁と同じであり、有力な候補地の一つである。さらに、「長者の屋敷跡」の南約100mにある原町平原遺跡では、大規模な柱穴をもつ大型の建物跡が発見されている。建物の主軸方位が正方位を向き、阿恵官衛遺跡の正倉群と同じであることから、8世紀後半の郡衛関連施設である可能性が高い。

官衛と古代道路の関係をみる



第3図 内橋登り上り遺跡調査現場(1/1,000)

と、阿恵官衙遺跡は駅路と伝路が交差する衢に立地することが明らかになった。この駅路は大宰府と都を結ぶ大路であり、中央政権が最も重視した古代道路である。この駅路沿いに内橋坪見遺跡が位置する。

内橋坪見遺跡は、大宰府式鬼瓦、赤色顔料が付着した両切軒平瓦など多量の瓦が出土し、大型の建物群と圍繞施設を伴うことから、駅家(夷守駅)の可能性が高いと考えられる。

その夷守駅が置かれた駅路の近く、多々良川に隣接した低地に多々良込田遺跡がある。掘立柱建

物群と多くの船載品や、役人の存在を示す石帯などが出土している。立地環境と多様な出土品を考えると港湾施設とみるのが妥当であろう。しかも大宰府式鬼瓦が出土していることから、郡津レベルではなく、大宰府の影響が強い港と思われる。

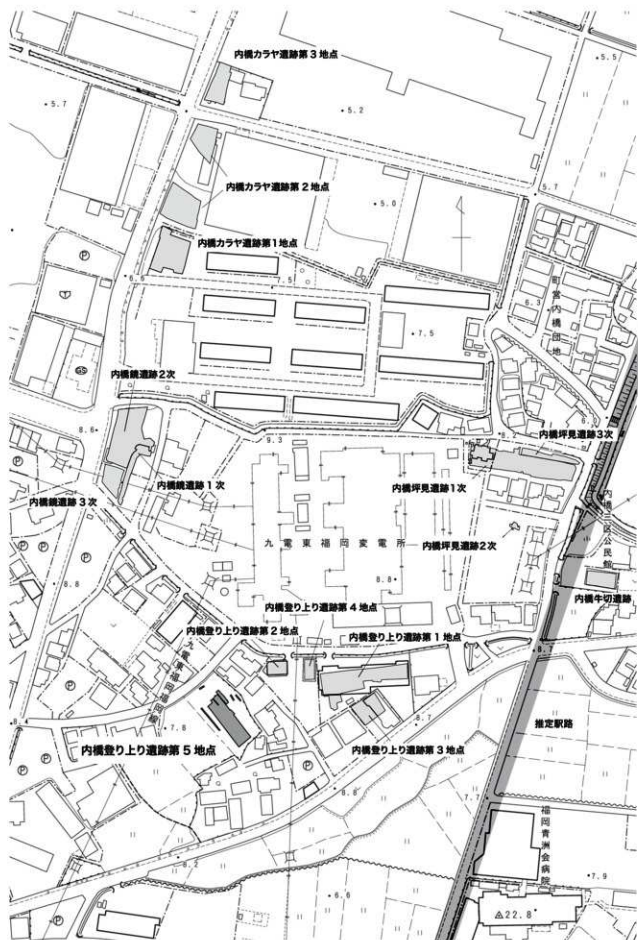
また、多々良込田遺跡から博多湾に出ると、その対岸に、大宰府の主厨司が管轄する津尉に比定される海の中道遺跡がある。

一方、多々良川中流域に目を転じると、8世紀後半の倉庫群を含む掘立柱建物群や、白磁大皿、褐彩釉水注などの官衙級の輸入陶磁

器、「加麻又郡」のへら書き須臾器等が出土した江辻遺跡第6地点がある。何らかの公権力の統制下に置かれた官衙関連遺跡であるが、建物群の規模からみて、郡衙の末端施設と考えられる。

また、乙大丘陵から派生した低丘陵上に、8世紀後半～末の創建とされる駕輿丁廃寺がある。伽藍配置等の遺構は不明であるが、塔心礎が出土しているため寺院跡であることは間違いない。

船屋町周辺は、官道、夷守駅、港、郡衙、寺院などがあり、古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもつ地域となっている。



第4図 内橋登り上り道跡周辺図(1/2,500)

2. 調査成果

調査成果

遺跡の概要

本調査地から東側の丘陵に内橋登り遺跡第1地点～第4地点が所在する。本調査地は過去の調査地より標高約2m低所に所在する。そのため、調査地南東側は確たる遺構はなく、大きく削平を受けていると考えられる。

今回の調査では、5世紀後半と考えられる円筒埴輪が溝状遺構から出土し、6世紀後半の遺物と共伴する。円筒埴輪は残りがよく、流入は考え難く、意図的に外部から搬入された可能性がある。また、古墳時代前期の高杯で井戸封じが行われた井戸を検出し、上層では円筒埴輪片と6世紀後半の須恵器が共伴する。



第1号溝状遺構、第2号溝状遺構合流部

調査では、掘立柱建物1棟、溝状遺構2条、土坑11基を確認した。特筆すべきは状態の良い古墳時代中期の円筒埴輪の検出である。しかしながら、古墳時代後期の遺物と共伴しており、後世になっているの搬入品と考えられる。

掘立柱建物(第5図第6図)

調査地の北西側で検出した。主軸方位はN-85.4°-Wであり、正方位とは4.6°ずれるが、ほぼ東西棟の掘立柱建物となる。建物規模は桁行3間以上、梁行1間であり、調査区外へと延びる。後述する第1号溝状遺構の範囲確認のため、調査範囲を広げた際に確認しており、第1号溝状遺構の下から検出した。P1、P4、P5のみ掘削している。柱痕は確認できなかった。遺物は細片のために図示し得ない。

溝状遺構

第1号溝状遺構(第5図)

調査時は包含層と捉え調査を行っていたが、第2号溝状遺構が流れ込む状況や、出土遺物が小片ばかりではなく、残存状況の良い遺物が多く、マメツが少なくいことなどから、溝状遺構として報告する。

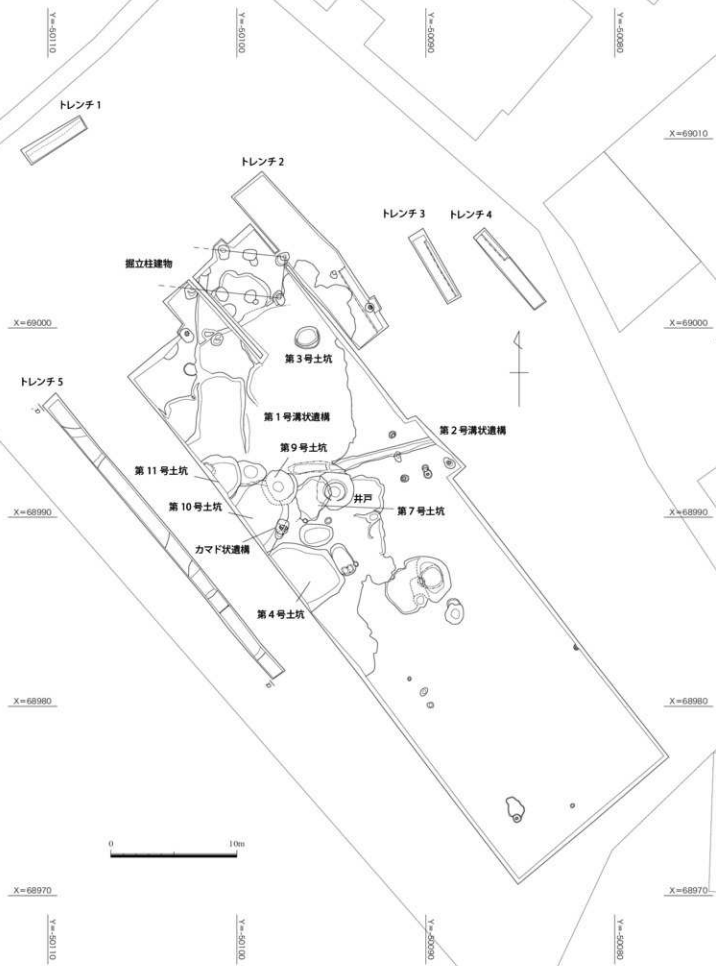
調査地の北東側で確認した幅12m以上の大溝で、掘方は緩やかに立ち上がる。底部は均一ではなく、凸凹な形状となる。また、西側上端の掘方ラインは直線的で南北方向に走るが、東側の上端は直線的ではなく、波状となる。

調査途中、溝状遺構から円筒埴輪が出土し、古墳の周溝である可能性が出てきたため、確認調査の目的で調査範囲拡張を行った(第3号土坑より北西側、第11号土坑より北西側、トレンチ1～5、詳細は後述)。その結果、第1号溝状遺構は第3号土坑より北西側の拡張部とトレンチ2で終焉を捉え、古墳を巡るような要素がなかったため、古墳の周溝ではないことが判明した。円筒埴輪は後述する井戸でも出土している。

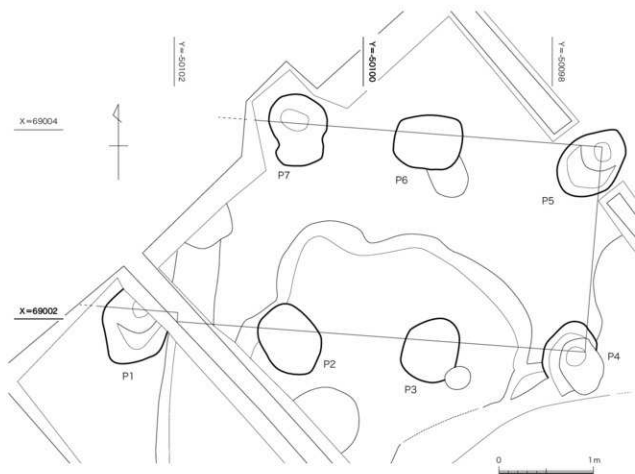
第1号溝状遺構上層出土遺物 (第7図、第8図)

第1号溝状遺構出土遺物は上層、中層、下層に分けて報告する。

1～27は須恵器。1～7は杯蓋。1は復元口径13.2cm、高さ5.3cm、つまみ復元径3.6cm。天井部はカキメが施される。色調は外面が暗赤灰色(7.5R3/1)、内面が赤灰色(7.5R6/1)、断面にはぶい赤褐色(10R6/3)を呈す。2は残高2.3cm、つまみ径2.3cm。3は復元口径13.4cm、高さ3.8cm。4は口径12.8cm、高さ3.9cm。5は復元口径11.0cm、高さ3.2cm。外天井部にヘラ記号が施される。6は口径9.8cm、高さ3.3cm。ヘラケズリはなく、外天井部にヘラ記号が施される。7は復元口径8.6cm、高さ2.8cm、受け部径10.6cm。口縁部にかえりがつく。8～13



第 5 図 内橋登り上り遺跡第 5 地点全体図 (1/300)



第6図 獨立柱建物平面図、断面図(1/40)

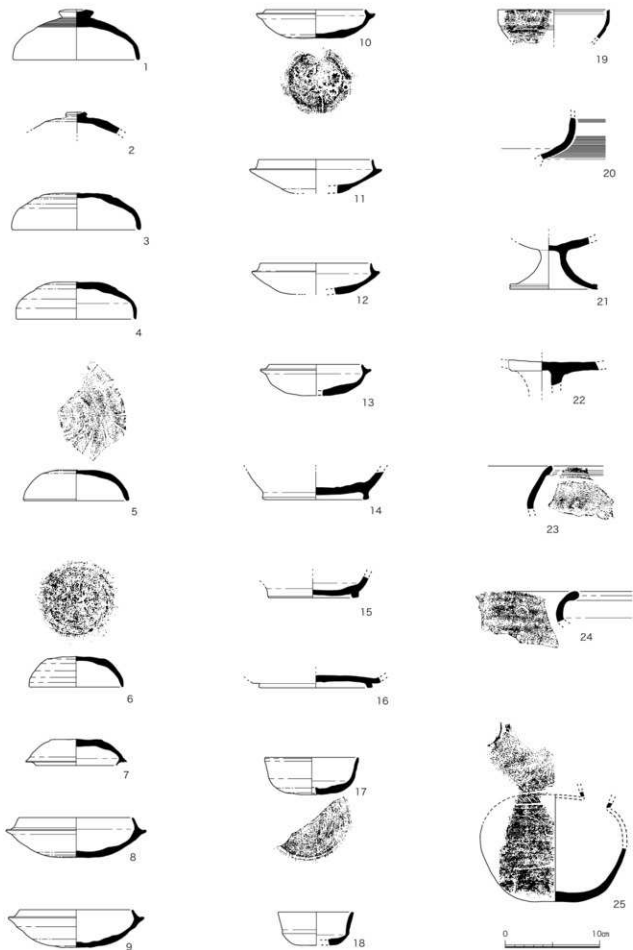
は杯身。8は口径12.2cm、高さ4.2cm、受け部径14.8cm。9は口径12.2cm、高さ4.0cm、受け部径14.4cm。10は復元口径10.8cm、高さ3.0cm、受け部径12.6cm。外底部にヘラ記号が施される。11は復元口径12.0cm、残高3.6cm、口縁端部に打ち欠いたような痕跡が残る。12は復元口径11.8cm、残高4.3cm、復元受け部径13.6cm。ヘラケズリの痕跡は見られない。13は復元口径9.8cm、残高3.3cm、受け部径11.8cm。ヘラケズリの痕跡は見られない。14～16は高台付き杯身。14は復元高台径11.2cm、残高2.9cm。高台は高く、外への踏ん張り強い。15は高台径11.8cm、残高3.2cm。高台は低くなる。16は復元高台径12.0cm、残高1.3cm。高台は立ち上がり部よりも内側に付けられる。17～19は碗。17は復元口径9.8cm、高さ3.9cm。外底部にヘラ記号が施される。18は復元口径7.8cm、残高3.5cm。底部から体部へと立ち上がり部が膨らみ、その後真っ直ぐに立ち上がる。底部はナデか。19は復元口径11.8cm、残高3.1cm。体部中央に凹み部があり、その上部、下部に波状文が施される。口縁端部は外から内へと内傾する。20は高杯か。残高4.5cm。丸く膨らみながら立ち上がる。下部には脚がついていたような段差が残る。上部と下部にそれぞれカキメが施される。断面の色調はにぶい赤褐色(7.5YR5/3)。21、22は高杯。21は復元底径10.4cm、残高5.5cm。脚部は強く踏ん張り、脚端部は凹線状となる。22は残高2.2cm。23は甕。残高4.6cm。外面に波状文が施される。24は壺。残高3.4cm。

内面に三日月状の記号が施される。25は平瓶。残高11.5cm。体部下から肩部にかけてカキメ、その後2条の沈線が施される。沈線の間に斜線文が刻まれる。26は甕。復元口径19.8cm、残高10.6cm。外面は体部にカキメを施らせ、内面は体部に同心円文の当て具痕が残る。27は播鉢。天井部復元径4.2cm、残高4.5cm。天井部は丸みを帯びており、外側へと緩やかに傾斜する。端部はくの字状を描き、内側へと入り込み、下方へと伸びる。下部は焼成時の色調と思われる灰色(N4/0)を呈すが、天井部は表面が剥離し、灰白色(N8/0)である。28は平底の鉢。土師器か。復元底径7.6cm、残高3.0cm。外面はマメツし、砂粒が表出するが、火を受け続けたためか明赤褐色(5YR5/8)を呈し、内面は黒色で、ナデ調整。29は土師器の甕。残高9.8cm。紙幅の関係上、未掲載だが、甕の把手部は他にも多く出土している。30、31は土錘。30は残長8.1cm、幅1.8cm。31は長7.2cm、幅2.0cm。32～39は赤焼土器。32～38は甕。32は復元口径29.4cm、残高10.6cm。内外ともにマメツ。33は復元口径20.4cm、残高9.4cm。外面は口縁部が横ナデ、体部が縦ハケ後タタキ、内面は口縁部が横ナデ、体部が縦ハケ。34は口径19.6cm、残高11.6cm。外面は口縁部が横ナデ、体部が縦ハケ後タタキ、内面は口縁部が横ナデ、体部が縦ハケ。35は復元口径16.0cm、残高8.3cm。外面は口縁部が横ナデ、体部がタタキ、内面は口縁部が横ナデ、体部がハケ状の工具でけずったような痕跡が残る。36は復元口径12.4cm、残高2.9cm。外面は

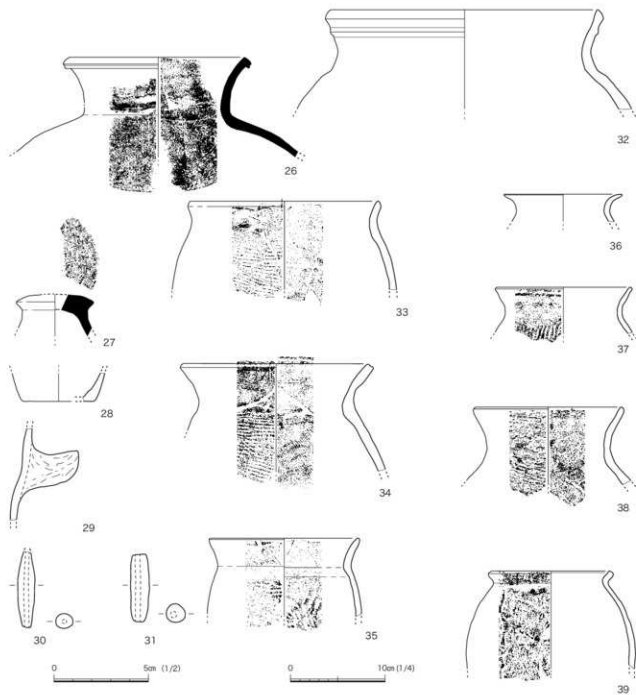
マメツ、内面は横ナデ。37は復元口径14.6cm、残高5.0cm。外面は口縁部が横ナデ、体部が暗文状に施されたタタキ痕、内面はマメツ。38は復元口径16.0cm、残高8.3cm。外面は口縁部が横ナデ、体部がタタキ、内面は口縁部は横ナデ、体部はマメツ。39は甕。復元口径13.2cm、残高10.3cm。外面は口縁部が横ナデ、体部がタタキ、内面はマメツである。

第1号溝状遺構中層出土遺物 (第9図)

40～48は須臾器。40～42は杯蓋。40は口径9.0cm、高さ4.0cm、受け部径10.9cm。ヘラケズリの痕跡は見られない。外天井部にヘラ記号が施される。41は残高3.7cm。42はつまみ部のみ残る。つまみ径2.2cm、残高2.1cm。43～44は杯身。43は残高3.2cm、44は復元口径9.8cm、高さ3.2cm、復元受け部径12.4cm。回転ヘラケズリは施されない。45は高台付きの杯身。残高1.7cm。46は高杯か。復元口径15.0cm、残高2.7cm、復元受け部径17.4cm。47、48は甕。47は残高4.3cm。48は復元口径24.4cm、残高7.4cm。器面は荒れており、随所に焼成時に胎土中の空気が膨張したと思われる痕跡が残る。内面体部に同心円文の当て具痕が残る。49は円筒埴輪。底径19.8cm、復元口径31.2cm、高さ44.0cm。この埴輪は破片がまとまって出土が見られた(P29図版下)。口縁端部は緩やかに外反し、口縁端部外面に緩やかな稜ができる。3条の突帯を有し、いずれも断面形状はM字型。突帯により4区画



第7図 第1号溝状遺構上層出土遺物実測図(1/4)

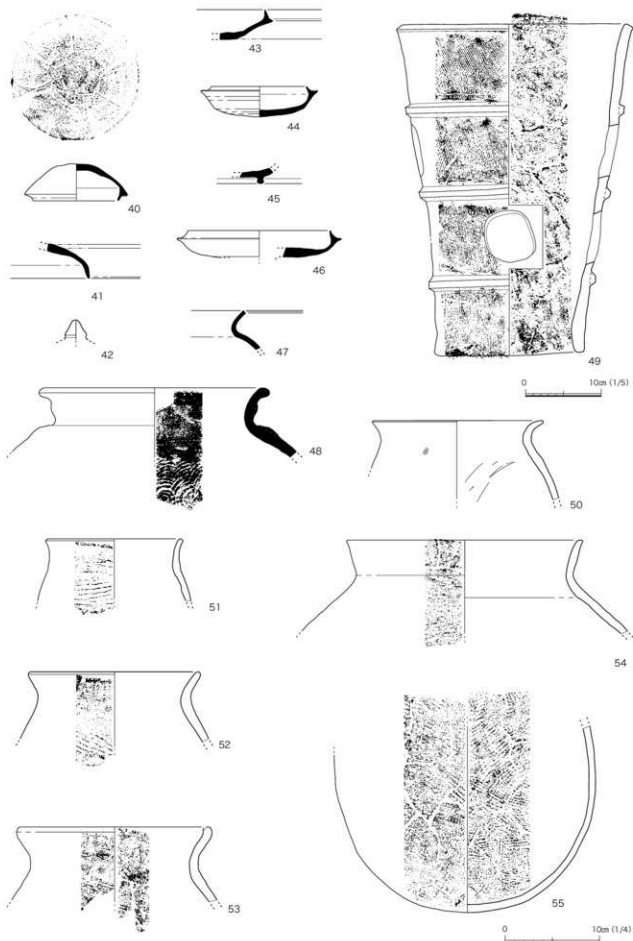


第8図 第1号溝状遺構上層出土遺物実測図 (1/4、30・31：1/2)

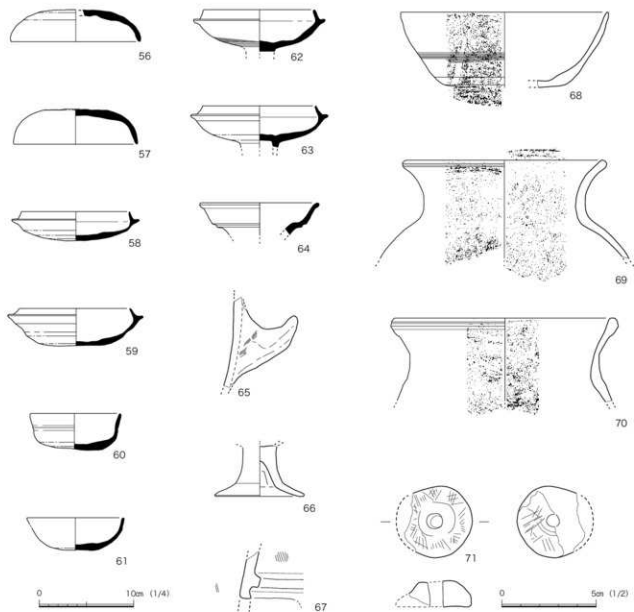
に分割され、底部から8.2cm～9.0cm、9.5cm～10.2cm、9.3cm～9.5cm、10.5cm～10.7cm、真ん中の2区画にスカシ孔が掘られ、上下で約90°ずつズレる。スカシ孔は6.5cm～7.3cm。外面はそれぞれの区画に縦ハケ後、突帯が接合される。内面はナデだが、底部に強い指オサエの痕跡が残る。50は土師器の甕。口

径18.1cm、残高7.5cm。外面は口縁部が横ナデ、体部が縦ハケ、内面は口縁部が横ナデ、体部がヘラケズリ。51～55は赤焼土器の甕。51は復元口径14.6cm、残高6.5cm。外面は口縁部が横ナデ、体部がタタキ、内面はマメツ。52は復元口径18.2cm、残高7.4cm。外面は口縁部が横ナデ、体部がタタキ、内面はマメ

ツ。53は復元口径20.0cm、残高8.0cm。外面は口縁部が横ナデ、体部がタタキ、内面はマメツ。54は復元口径25.0cm、残高9.9cm。外面は口縁部が横ナデ、体部がタタキ、内面はマメツ。55は残高19.7cm、体部最大径27.6cm。内外面ともにタタキを施す。



第9図 第1号溝状遺構中層出土遺物実測図 (1/4、49: 1/5)



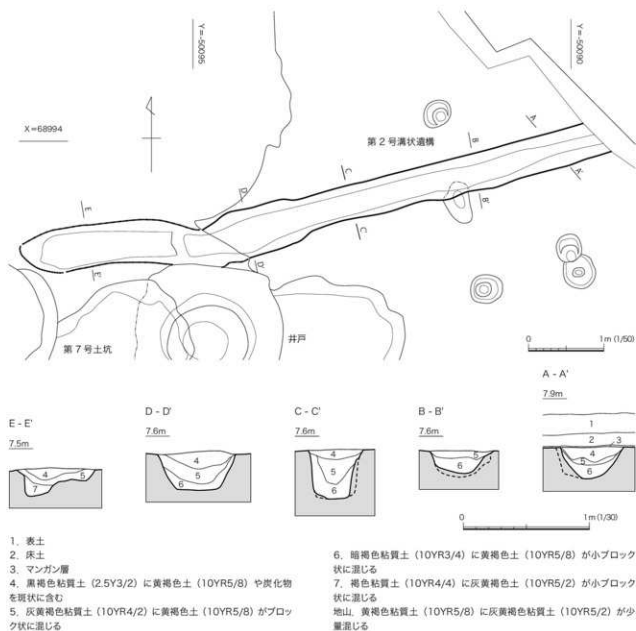
第10図 第1号溝状遺構下層出土遺物実測図 (1/4, 71:1/2)

第1号溝状遺構下層出土遺物
(第10図)

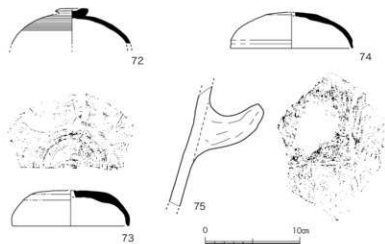
56～64は須恵器。56、57は杯蓋。56は復元口径13.6cm、残高3.4cm。57は復元口径13.2cm。残高3.7cm。58～59は杯身。58は復元口径11.4cm、高さ3.1cm、受け部径13.6cm。59は口径16.8cm、高さ4.0cm、受け部径14.4cm。色調は内外面ともに灰白色(N8/0)。焼成不良のようで、表面も脆く、軟質。60、61は碗。60は口径

9.6cm、高さ3.9cm。61は復元口径5.2cm、高さ3.5cm。62、63は高杯。62は口径11.4cm、高さ4.9cm、受け部径14.0cm。外面は回転ナデ後カキメ。脚はカキメの後に付けられる。63は復元口径12.0cm、残高3.1cm、受け部径13.6cm。64は甌。復元口径12.6cm、残高3.3cm。65、66は土師器。65は甕。残高9.6cm、把手の一部にハケメが見られる。66は高杯。復元口径9.4cm、残高5.4cm。杯部と脚部は、杯部に脚部を差して整形

する技法で製作されたと考えられる。脚部外面はヘラミガキ、内面はマメツ。67は円筒埴輪。残高5.0cm。突帯の形状は台形。突帯外部上面は縦ハケ、突帯部は横ナデ、内面にもハケの痕跡が一部見られる。下部はスカシ孔と思われる。68～70は赤焼土器。68は杯身(片碗)。復元口径22.0cm、残高7.9cm外面は体部中央から下部にかけてカキメのような沈線が巡る。内面は赤色顔料と思われる朱色が一部残り、ヘラミガキ。69は復元口



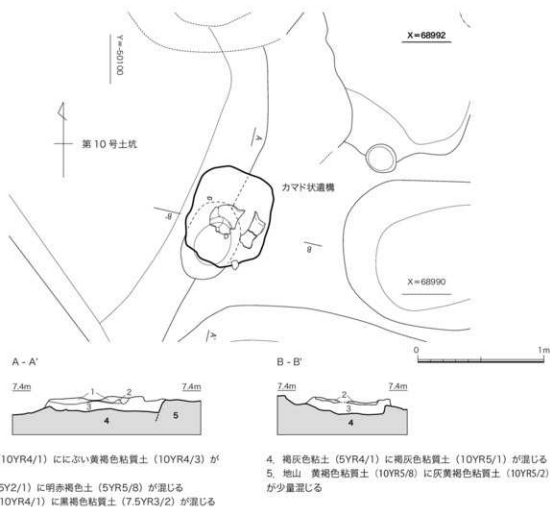
第11図 第2号溝状遺構平面図(1/50)、土層図(1/30)



第12図 第2号溝状遺構出土土遺物(1/4)

径21.4cm、残高10.4cm。外面は口縁部が横ナデ、体部が縦ハケ後タタキ。内面は口縁部が横ナデ、体部が縦ハケ。**70**は復元口径14.0cm、残高9.3cm。外面は口縁部が横ナデ、体部はマメツ、内面は口縁部が横ナデ、体部はヘラケズリのような痕跡が残る。**71**は紡錘車。滑石製で径3.7cm～3.9cm、厚1.4cmを測る。

第2号溝状遺構(第11図)



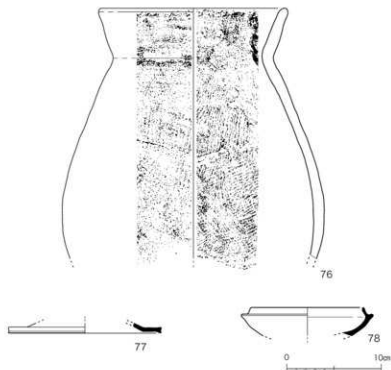
第13図 カマド状遺構平面図、土層図 (1/30)

調査地の中央西側で検出。長約7.9m、幅約30cm～40cmで東側の調査区外から始まり、第1号溝状遺構に流れ込む。深さは東側が約24cm (A-A')、中央部が深くなり約40cm (C-C')、その後高まりができ、南側が約10cm、北側が約21cmと2段構造になる (E-E')。

第2号溝状遺構出土遺物

(第12図)

72～74は須恵器の杯蓋。72はつまみ径3.4cm、残高3.8cm。外面は褐灰色 (10YR5/1)、内面はふい黄橙色 (10YR6/3)。外面は回転ナデ後カキメ。調整の後につまみを付けるが、接合部は接



第14図 カマド状遺構出土遺物 (1/4)

合痕が丁寧に仕上げられる。73は復元口径12.4cm、残高3.8cm。外天井部にヘラ記号が施される。74は復元口径13.0cm、残高3.8cm。75は赤焼土器の甕。残高12.7cm。外面はタタキが施され、その後手部が付けられる。

カマド状遺構(第13図)

調査地の中央より北西側で、第1号溝状遺構の中層で検出した。表土剥ぎ直後の段階で焼土が分布しており、滑石製の石や複数の土器が周辺に散布している状況(P31図版左上)などから、住居の可能性を想定し、調査を行った。しかしながら、住居のプランを検出できなかったため、断削を行ったところ(P31図版右上下)、わずかに立ち上がりが見出されたため、一帯をその面まで掘り下げた。その結果、長75cm、幅60cmの隅丸方形の遺構を検出した。掘り下げた段階で、76の土器の出土が見られた(P31図版左下)。住居等のプランなどを上面で確認することはできなかったが、炭や焼土が混入しており、土器が据えられていたと思われる痕跡も確認しており、祭祀遺構の可能性も指摘しておく。

この他にも、本調査地では焼土や炭が散布する状況であったが、不明瞭なため、プランや範囲を捉えることができず、掘削する中で消失してしまった遺構もある。

カマド状遺構出土遺物(第14図)

76は赤焼土器の甕。復元口径20.0cm、残高26.5cm。頸部か

ら体部は大きく膨らまず、緩やかに広がる。口縁部と頸部直下は、にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈すが、体部は褐色(7.5YR4/1)を呈し、焼成を受けた痕跡が残る。内外面ともに口縁部は横ナデ、外面体部はタタキ、内面体部はハケメ。他の出土遺物と比べても、器壁は厚く、粗雑な作りとなっている。77は須恵器の杯蓋。復元底径16.2cm、残高1.1cm。色調は内外面ともに灰白色(N8/O)を呈すが、硬質。78は須恵器の杯身。復元口径14.0cm、残高3.0cm、復元受け部径14.0cm。色調は内外面ともに灰白色(N8/O)を呈すが硬質である。

井戸(第15図)

調査区の中央で検出。第1号溝状遺構、第7号土坑に切られる。調査当初は土坑として掘削し、図面作成を行ったが、遺物を取り上げ後も、下に遺構が残っていることが判明した(P33図版左上)。さらに掘削を進めると、残存状況が良好な完形である土師器の高杯(79、80)が出土したため、その箇所から再度半截を行った。50cm程掘り下げたが、掘削範囲が狭小であったため、これ以上の調査は進められず、図面の一部が欠落している。5層より下層は79、80のみの出土である。

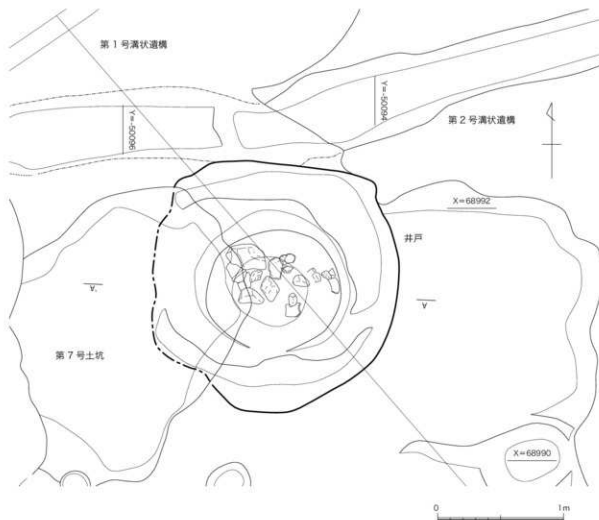
本遺構は径1.9mの掘方をもつ円形の井戸である。79、80がほぼ完形で出土が見られ、井戸を使わなくなった際は井戸封じの儀式が行われたと推測できる。

上層である5層以上の土坑状の箇所では、81や82などの円筒埴輪とともに6世紀後半の須

恵器が相伴して出土する(83～85)。

井戸出土遺物(第16図)

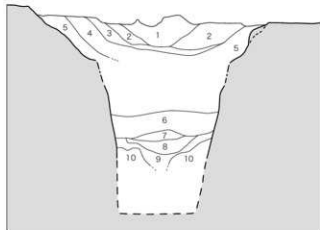
79、80は土師器の高杯。79は口径14.7cm、高さ9.2cm、底径10.9cm。杯底部は屈曲して緩やかに立ち上がりながら外反する。杯部上半と下半の間に緩やかな稜ができる。脚部は短く、裾部で広がる際に屈曲し、外面に緩やかな稜をもち、内面は強い稜となる。杯部と脚部が分かれて出土しており、杯の底部に丸く穴が開いた状態で出土した。そのため、杯部に脚部を接合する充填法ではなく、杯部に脚部を挿して整形する技法で製作されたと考えられる。脚部内面はヘラケズリが施され、その他はマメツしており不明。80は口径14.3cm、高さ9.5cm、高さ9.5cm。完形で出土。杯底部は屈曲して緩やかに立ち上がりながら外反する。脚部は短く、裾部で広がる際に屈曲し、緩やかな稜をもち、内面は強い稜をもつ。杯部と脚部の接合は完形での出土のため不明。杯内面には暗文が施される。脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ。81、82は円筒埴輪。81は復元底径18.4cm、残高19.8cm。突帯が1条つく。突帯の形状は台形、太さは均一ではない。底部から突帯までの長さは約9.0cm～約10.5cm。突帯下部の区画は一部縦ハケのような痕跡が残るが、板状工具で突帯下部から、縦に調整した痕跡、底部直上で横に調整した痕跡が残る。突帯上部は縦ハケ。内面はマメツ。82は残高10.4cm。突帯が1条つく。突帯の形状は台形。突帯上部にはスリ孔が確認される。突帯の上部



A - A'

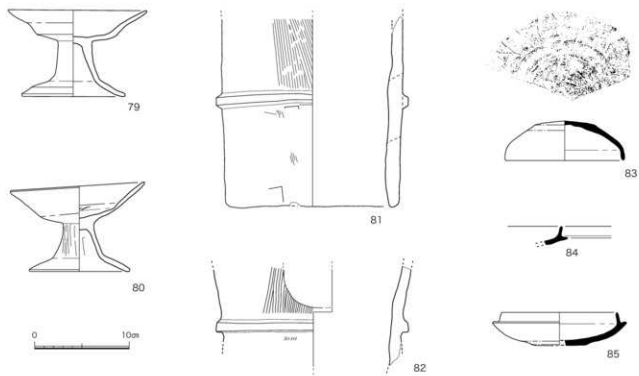
7.5m

7.5m

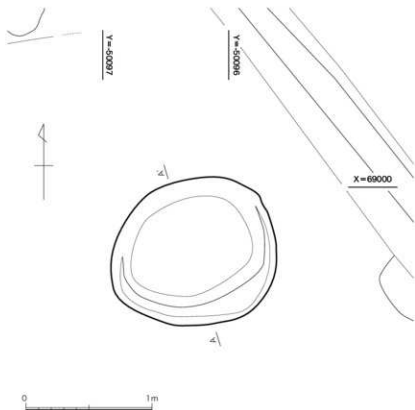


1. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/4) に暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) が粒状に混じる
2. にぶい褐色粘質土 (7.5YR5/3) に灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) と明黄褐色粘質土 (10YR7/6) がブロック状に混じる
3. 灰色粘質土 (N4/0) に橙色粘質土 (7.5YR6/8) がブロック状に混じる
4. 褐灰色粘質土 (10YR6/1) と明黄褐色粘質土 (10YR6/6)、にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) の混合土
5. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) に橙色粘質土 (7.5YR6/6) がブロック状に混じる
6. 黄褐色粘質土 (10YR5/6) ににぶい黄褐色粘土 (10YR5/3) が混じる
7. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) に砂が混じる しまりがなく軟質
8. 黄褐色粘質土 (10YR5/6) と灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) の混合土
9. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2) に黄褐色粘質土 (10YR5/6) と褐灰色粘土 (7.5YR4/1) が混じる
10. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) に黄褐色土 (10YR5/8) と黄灰色土 (2.5Y5/1) が混じる 炭化物を含む

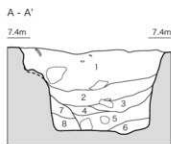
第15図 井戸平面図、土層図 (1/30)



第16図 井戸出土遺物(1/4)

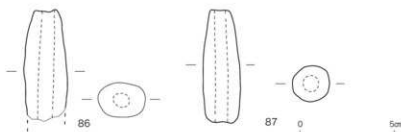


第17図 第3号土坑平面図、土層図(1/30)



1. 明赤褐色粘質土 (5YR5/6) 炭が混じる
2. にふい赤褐色粘質土 (5YR5/4) 炭が混じる
3. にふい赤褐色粘質土 (5YR5/4) 炭がわずかに混じる
4. 明赤褐色粘質土 (5YR5/4)
5. にふい黄褐色粘質土 (10YR5/4)
6. にふい黄褐色粘質土 (10YR5/4) 炭がわずかに混じる
7. 褐色粘質土 (10YR4/6) に黄褐色粘質土 (10YR5/6) が混じる
8. 褐色粘質土 (10YR4/6)

画、下区画ともに縦ハケ、内面はマメツ。83は須恵器の杯蓋。復元口径12.8cm、高さ4.3cm。外面天井部にヘラ記号が施される。84、85は須恵器の杯身。84は残高2.0cm。85は復元口径12.2cm、残高3.5cmを測る。



第18図 第3号土坑出土遺物(1/2)

土坑

第3号土坑(第17図)

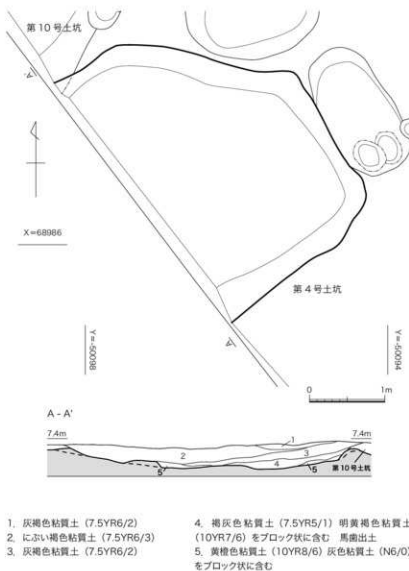
調査地の北東で検出。南北約1.1m、東西約1.3m、深さ約60cmの土坑。南側に1段テラスを設ける。中には滑石や礫が多く混入する。

第3号土坑出土遺物(第18図)

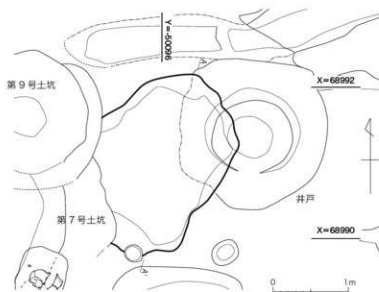
86、87ともに土鍾。86は残長6.0cm、幅2.0cm。87は長6.1cm、幅2.0cmを測る。

第4号土坑(第19図)

調査区の中央、西側で検出した土坑。第10号土坑を切っている。南北約4m、東西2.5m以上、深さ約30cmを測る。調査区外の南西へと延びるが、トレンチ5で第4号土坑と同様の埋土(第27図-30層)を検出し、位置も傾斜がないことから、トレンチ5よりも西側へと延びると考えられる。また、土坑の南で馬の骨と思われる動物依存体を検出した(P34 図版下)。出土した要因は不明だが、本遺跡の北東約250mの地点には古代の駅家である夷守駅の可能性が高い内橋坪見遺跡が所在しており、何らかの関係性が推察されるが、本遺構の時期が確



第19図 第4号土坑平面図、土層図(1/50)



第20図 第7号土坑平面図、土層図(1/50)

1. 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
2. 黄褐色粘質土 (10YR5/8)
3. 褐灰色粘質土 (10YR5/1)

定しておらず、推測にとどまる。
出土遺物は細片であり、図示し得ない。

第7号土坑 (第20図)

調査地の中央で検出。南北約2.3m、東西約1.6m以上を測る隅丸方形の土坑。井戸を切っている。立ち上がりは緩やかであり、人為的ではない可能性がある。出土遺物は細片であり、図示し得ない。

第9号土坑 (第21図)

調査地の中央、西側で検出。南北1.7m、東西1.4m以上を測る楕円形の土坑。炭を多く含んでい



第21図 第9号土坑平面図、土層図(1/30)

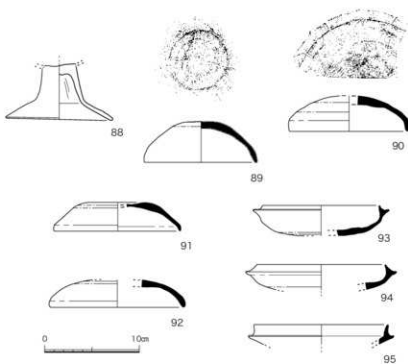
1. 橙色粘質土 (7.5YR4/3)
2. 褐色粘質土 (7.5YR4/3)
3. 褐色粘質土 (7.5YR6/6)
4. におい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
5. 明褐色粘質土 (7.5YR5/6)
6. におい赤褐色粘質土 (5YR5/4)
7. 褐色粘質土 (10YR4/4)
8. 褐色粘質土 (10YR4/4)
9. 明褐色粘質土 (7.5YR5/6)
10. 褐色粘質土 (7.5YR4/3)
11. 褐色粘質土 (7.5YR6/6)
12. 炭を含む
13. 炭を少量含む
14. 炭を少量含む
15. 炭を少量含む
16. レキ、炭を少量含む
17. 炭を含む
18. 炭を少量含む

第21図 第9号土坑平面図、土層図(1/30)

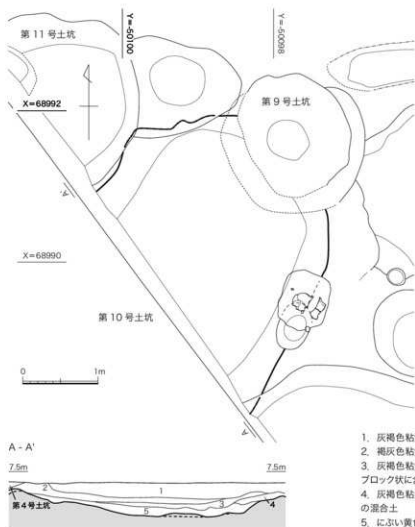
る。土層の第9層が示す遺構を切っているが、半截する際に層序による差異と捉えており、第9層の遺構については不明である。

第9号土坑出土遺物 (第22図)

88は土師器の高杯。底径11.3cm、残高6.0cm。杯部と脚部は79と同様、杯部に脚部を差して整形する技法で制作されたと考えられる。脚部内面はヘラケズリ、他はマメツ。89～95は須恵器。89～92は杯蓋。89は口径12.0cm、高さ4.4cm。色調は橙色(7.5YR6/6)で硬質。外面天井部にヘラ記号を施



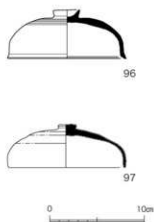
第22図 第9号土坑出土遺物実測図(1/4)

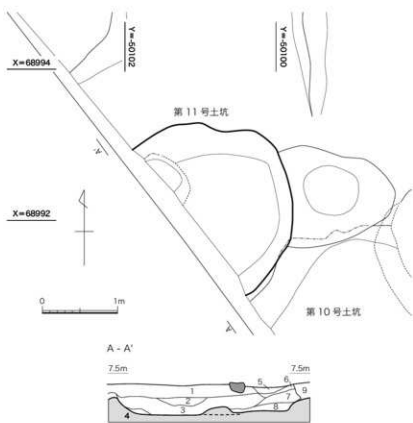


第23図 第10号土坑平面図、土層図(1/50)

1. 灰褐色粘質土 (7.5YR5/2)
2. 飛灰色粘質土 (7.5YR6/1)
3. 灰褐色粘質土 (7.5YR6/2) 浅黄橙色粘質土 (7.5YR8/6) をブロック状に含む
4. 灰褐色粘質土 (7.5YR5/2) とにふい黄橙色粘質土 (10YR7/4) の混合土
5. にふい黄色粘質土 (2.5YR6/4) と黄橙色粘質土 (10YR8/8) の混合土

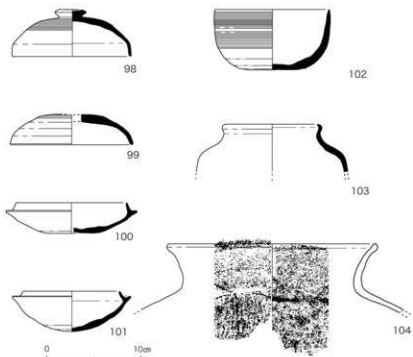
第24図 第10号土坑出土遺物実測図(1/4)





1. にぶい赤褐色粘質土 (5YR5/3)
2. 灰褐色粘質土 (7.5YR6/2) 炭を含む
3. にぶい褐色粘質土 (7.5YR6/3)
4. にぶい褐色粘質土 (7.5YR6/3)
5. 褐灰色粘質土 (7.5YR3/1)
6. にぶい黄褐色粘質土 (10YR7/4)
7. にぶい褐色粘質土 (7.5YR6/3)
8. 灰褐色粘質土 (7.5YR6/2) に橙色土 (7.5YR6/8)
9. 明黄褐色粘質土 (10YR7/6) ににぶい黄褐色粘質土 (10YR6/3) をブロック状に含む

第25図 第11号土坑平面図、土層図 (1/50)



第26図 トレンチ5出土遺物 (1/4)

す。90は復元口径12.6cm、高さ3.8cm。外面天井部にヘラ記号を施す。91は復元口径13.4cm、高さ3.0cm。92は復元口径14.0cm、高さ2.4cm。93～95は杯身。93は復元口径12.4cm、高さ3.5cm、復元受け部径14.4cm。94は復元口径13.6cm、残高2.7cm、復元受け部径16.0cm。95は復元口径14.2cm、残高1.3cm、復元受け部径15.4cmを測る。

第10号土坑 (第23図)

調査地の北西で検出。南北約3.8m、東西2m以上を測り、調査区外へと延びる。深さは約25cmを測る。第11号土坑との前後関係は不明

第10号土坑出土遺物(第24図)

96、97は須恵器の杯蓋。96は口径12.6cm、口径5.2cm。色調は明赤褐色 (5YR5/8) で硬質。97は口径12.4cm、高さ4.1cm。色調は灰白色 (N8/0) で軟質である。

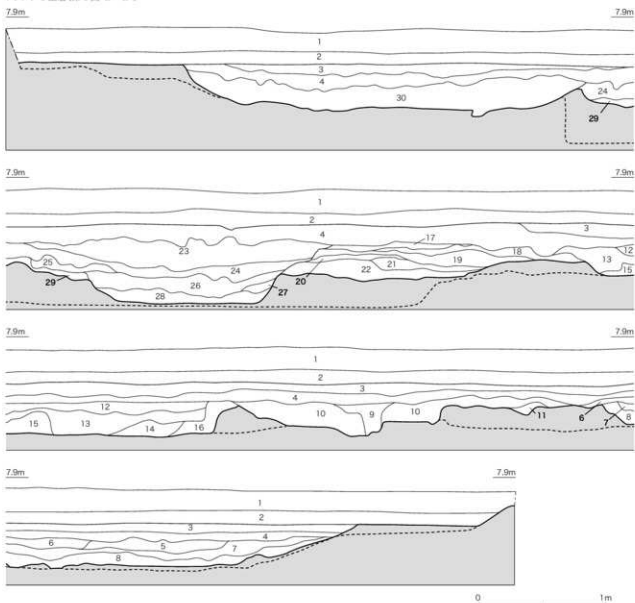
第11号土坑 (第25図)

調査地の北西で検出。南北2.2m、東西1.4m以上を測り、調査区外へ延びる。深さは約25cm。第10号土坑と前後関係は不明。出土遺物はない。

拡張トレンチ

第1号溝状遺構の規模を確認するために、調査したトレンチで

トレンチ5土層(第5図 α-α')



1. 耕作土 灰黄褐色土 (2.5Y7/2)
 2. 床土 明黄褐色土 (2.5Y7/6)
 3. 灰色粘質土 (N6/0)
 4. 灰褐色粘質土 (5YR6/2)
 5. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) と黄褐色粘質土 (10YR5/8) の混合物
 6. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) に黄褐色土 (2.5Y5/6) が粒状に混じる
 7. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 炭化物多く含む
 8. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) に黄褐色粘質土 (2.5Y5/6)、炭化物を少量含む
 9. 灰褐色粘質土 (7.5YR5/2) に黄褐色土 (10YR5/6) が粒状に混じる
 10. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) と黄褐色粘質土 (10YR5/3) がブロック状に混じる
 11. 灰黄褐色粘質土 (7.5YR5/2) に黒褐色粘質土 (7.5YR3/2) が混じる
 12. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) に褐色粘質土 (7.5YR4/4) が混じる
 13. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) と黄褐色粘質土 (10YR5/3) の混合物
 14. 黄褐色粘質土 (10YR5/6) と黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) の混合物
 15. 黄褐色粘質土 (10YR5/6) ににぶい黄褐色粘質土 (7.5YR4/2) と灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) が混じる
 16. 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) とにぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3) が混じる
 17. 褐色粘質土 (10YR4/4) と暗灰黄色粘質土 (10YR6/8) の混合物
 18. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 炭化物が少量混じる
 19. 褐灰色粘質土 (10YR4/1) と明黄褐色粘質土 (10YR5/1) が混じる
 20. 灰黄褐色粘質土 (10YR6/6) に褐色土 (10YR4/6) が少量混じる
 21. 明黄褐色粘質土 (10YR5/1) に褐灰色粘質土 (10YR4/1) が少量混じる
 22. 褐色粘質土 (10YR5/1)
 23. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2)
 24. 黒褐色粘質土 (10YR3/2)
 25. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) に褐色粘質土 (10YR4/6) が混じる
 26. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
 27. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2) に明黄褐色粘質土 (10YR6/8) を少量含む
 28. 暗黄色粘質土 (2.5T6/2) に明褐色粘質土 (10YR7/8) が混じる
 29. 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) に褐灰色粘質土 (10YR5/1) が少量混じる
 30. 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2)
- 地山, 明黄褐色粘質土 (10YR6/8) に黄灰色粘質土が少量混じる

第27図 トレンチ5北西壁土層面 (1/30)

ある。

トレンチ1 (第5図、図版P37)

トレンチ1は調査地の北側に位置する。調査の結果、削平された地山と掘乱を確認したのみであった。申請地は水田と利用されていた場所であり、北側の道路面と1mの高低差がある。水田整備する際に削平されたと考えられる。

トレンチ3・4

(第5図、図版P37、P39)

トレンチ3・4は第1号溝状遺構がトレンチ1の方向に延伸しないことを確認したため、屈曲して延伸することを想定して、調査を行った。しかしながら、トレンチ1と同様に削平された地山を確認したのみであった。

トレンチ2 (第5図、図版P37)

トレンチ2は、トレンチ3・4で第1号溝状遺構の延伸を確認できなかったため、調査地に隣接する箇所でも調査を行った。その結果、トレンチ2で第1号溝状遺構の終焉を捉え、削平されているようではあるが、北東側へは延伸していないことを確認した。また、柱穴を確認したため、周囲の拡張を行い、掘立柱建物を確認するに至った。

トレンチ5 (第5・27図、

図版P37～P40)

トレンチ5は第1号溝状遺構の範囲確認とともに、西側に点在する土坑の広がりを確認するために調査を行った。第1号溝状遺構、第4号土坑の広がりを確認できたが、その他の土坑は広がりを確

認できず、新たな土坑が点在することが確認された。

トレンチ5出土遺物(第26図)

98～103は須恵器。98、99は杯蓋。98は口径12.6cm、高さ5.0cm、外面は回転ナデ後カキメ。つまみはカキメの後につけられる。99は復元口径12.8cm、残高3.2cm。100、101は杯身。100は復元口径11.6cm、残高3.2cm、復元受け部径14.0cm。101は復元口径10.0cm、高さ4.3cm、復元受け部径12.6cm。102は椀。復元口径12.0cm、高さ6.4cm、回転ナデ後ヘラケズリ、体部中央から口縁部にかけてカキメ、途中2条の沈線。103は壺。復元口径10.0cm、残高5.0cm。104は赤焼土器。復元口径22.4cm、残高7.3cm、外面は口縁部が横ナデ、体部がタタキ。内面は口縁部が横ナデ、体部が縦ハケを施す。

おわりに

内橋登り上り遺跡は、第1地点で弥生時代後期の墓域、古墳時代から奈良時代の集落域、第2地点では古墳時代から奈良時代にかけての廃棄土坑、第3地点では第1地点で検出した集落域の広がり、第4地点では第2地点の廃棄土坑の広がりを確認している。

内橋登り上り遺跡第5地点では、古墳時代前期から後期を通じた遺物が出土する井戸、古墳時代中期の円筒埴輪が出土する古代の溝状遺構、馬の歯と思われる動物依存体が出土する土坑などを検出

した。

井戸は、中・下層から古墳時代前期後半と考えられる高杯が2点(79、80)出土した。79は割れていたが、脚部が下を向いており、上下を意識して埋納したと考えられる。80は完形で同じく脚部が下で出土した。このような出土状況から、廃絶時に井戸封じの儀式が行われたことに起因すると考える。上層では、古墳時代中期の円筒埴輪片と古墳時代後期の須恵器が共存して出土し、井戸を塞ぐように出土している。これは、なんらかの意図をもって埋納したと考えられるが、遺物の時期差について、その要因を求めることができず、不明である。

また第1号溝状遺構から、円筒埴輪(49)1個体がまとまって出土した。周辺の調査を行ったが、古墳の周溝とはならなかった。本調査地の北約300mに、前期古墳である内橋カラヤ古墳が発見されている。この周辺で継続する古墳は発見されておらず、近隣に古墳時代中期の古墳が築造されていた可能性を示唆する発見であったと考える。今後の調査による解明に期待したい。

文末ではありますが、本遺跡の調査中、辻田淳一郎氏(九州大学)、井上義也氏(春日市教育委員会)にご意見・ご教示等を賜りましたこと記して感謝申し上げます。

参考文献

- 重藤 輝行 2009「古墳時代中期-後期の筑前・筑後の土師器」『地域の考古学』
- 井上 義也 2007「九州における古墳時代中期の埴輪」『九州島における中期古墳の再検討』

3. 図版



調査地全景 (南東から)



調査地全景（北西から）



第1号講完掘状況(北から)



円筒埴輪出土状況遠景(北西から)



円筒埴輪出土状況近景(西から)



第2号溝状遺構完面状況(東から)



第2号溝状遺構土層 A-A'(西から)



第2号溝状遺構土層 B-B'(東から)



第2号溝状遺構土層 D-D'(東から)



第2号溝状遺構土層 C-C'(東から)



第2号溝状遺構土層 E-E'(西から)



カマド伏道構検出状況遠景(南から)



カマド伏道構検出状況近景(南から)



カマド伏道構上層(南西から)



カマド伏道構検出状況(西から)



カマド伏道構上層 A-A'(西から)



カマド伏道構上層 B-B'(北から)



井戸上層土層 (北から)



井戸上層遺物出土状況 (西から)



井戸上層遺物除去後 (西から)



井戸完備状況 (東から)



井戸中層遺物出土状況 (東から)



第3号土坑土層 (東から)



第3号土坑完備状況 (東から)



第4号土坑土層（東から）



第4号土坑馬南検出状況遠景（北東から）



第4号土坑馬南検出状況近景（北東から）



第7号土坑土層（西から）



第9号土坑土層（西から）



第9号土坑遺物出土状況(南西から)



第9号土坑完掘状況(西から)



第10号土坑土層(東から)



第11号土坑土層(東から)



第11号土坑床面(北から)



トレンチ1 横出状況(西から)



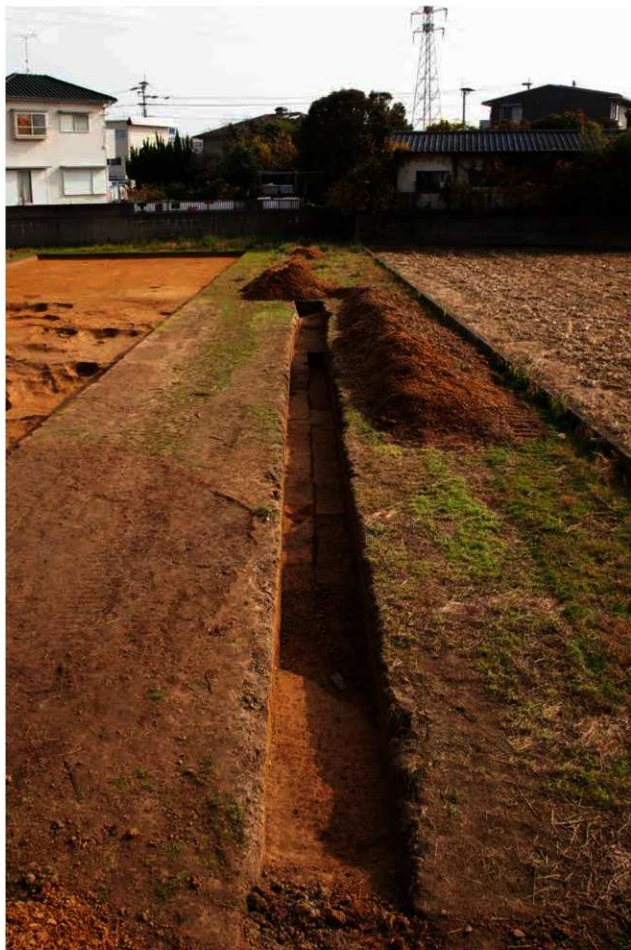
トレンチ1 完掘状況(西から)



トレンチ2 横出状況(北西から)



トレンチ3 横出状況(北から)



トレンチ5調査状況(北西から)



トレンチ4横出状況(西から)



トレンチ5横出状況(北西から)



トレンチ5西壁土層 2/10 (北東から)



トレンチ5西壁土層 1/10 (北東から)



トレンチ5西壁土層 4/10 (北東から)



トレンチ5西壁土層 3/10 (北東から)



トレンチ5 西壁土層 6/10 (北東から)



トレンチ5 西壁土層 5/10 (北東から)



トレンチ5 西壁土層 8/10 (北東から)



トレンチ5 西壁土層 7/10 (北東から)



トレンチ5 西壁土層 10/10 (北東から)



トレンチ5 西壁土層 9/10 (北東から)



1



59



19



62



25



67



27



68







81



82



75



80



76



89



96



79



97

報告書抄録

ふりがな	うちはしのぼりあがりいせきだい5ちてん							
書名	内橋登り上り遺跡第5地点							
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第53集							
編著者名	高橋 幸作							
編集機関	粕屋町教育委員会							
所在地	〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号							
発行年月日	2020年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内橋登り上り遺跡 第5地点	福岡県糟屋郡粕屋町 大字内橋字登り上り284-1	403491	280082	33°37'15"	130°27'36"	2018.9.6 ～ 2018.12.14	約402㎡	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
内橋登り上り遺跡 第5地点	集落	古墳時代 ～ 奈良時代	掘立柱建物、溝状遺構、井戸、土坑、カマド状遺構	土師器、須恵器、埴輪、石器	円筒埴輪出土			
要約	内橋登り上り遺跡第5地点では、掘立柱建物1棟、溝状遺構2条、土坑11基、井戸1基等を確認した。第1号溝状遺構や井戸より5世紀後半の円筒埴輪の出土が見られる。それぞれ6世紀後半代の遺物と共存しており、円筒埴輪は後代になって意図的に搬入された遺物と考えられるが、その要因は不明である。							

内橋登り上り遺跡第5地点 粕屋町文化財調査報告書第53集

令和2年3月31日 発行

発行 粕屋町教育委員会

〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号（粕屋町立歴史資料館）

印刷・製本 株式会社三光

〒812-0015 福岡県福岡市博多区山王一丁目14-4